



TITLE:

# 古代チベット帝國の外交と「三國會盟」の成立

AUTHOR(S):

岩尾, 一史

---

CITATION:

岩尾, 一史. 古代チベット帝國の外交と「三國會盟」の成立. 東洋史研究  
2014, 72(4): 715-680

ISSUE DATE:

2014-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/219432>

RIGHT:

# 古代チベット帝国の外交と 「三国会盟」の成立

岩 尾 一 史

1. はじめに
2. 問題の所在
3. 南詔との会盟
4. 会盟の実態
  - 4.1 史料残存の偏差
  - 4.2 会盟は同時に行われたか
  - 4.3 会盟にいたるまでの経緯
5. 会盟がチベットに与えた影響
6. むすび

## 1. はじめに

7世紀から9世紀にかけての中央アジアは、古代チベット帝国（吐蕃）<sup>(1)</sup>、唐、

---

(1) 本稿では Beckwith (1987a, pp. 14-15, 特に n. 10) に従い、チベットの古代王朝を「古代チベット帝国」と呼ぶ。なお、チベットの自称は古代より一貫して bod であるが、一方でその他称は、Bazin and Hamilton (1991) が詳細に明らかにしたとおり、ソグド語の twp'yt や古トルコ語の Töpüt, 漢語の吐蕃にはじまり、モンゴル語の Töböt からペルシア語の Tibit, Tibbit, Tibbet, Tibat, Tibbut, Tubbat, ヨーロッパ諸語の Tibet, Tebet, Thebet, 現在英語の Tibet に到るまで、おしなべて tbt~tbn あるいは tbbt という子音の連続で構成される。言うまでもなく、日本語の「チベット」は明らかに英語の Tibet に由来する。元来その他称が何かという問題はあるものの、本稿では誤解を避けるためにも現在最も人口ノ

突厥、ウイグル、バグダード・アッバース朝など大国の勢力が激突する場であり、必然的に当時の中央アジア史は、戦争史の様相を呈した<sup>(2)</sup>。しかしその一方で、各国は姻戚関係や会盟を通じて繰り返し和平をめざした。こういった和平を目指す動きの中で最後に位置するのが、本稿の関心事項である、822年から823年にかけて、チベット、唐、ウイグルの三国間における会盟である。以降少なくとも三国の間にめだった戦争が生じなかったという点において、それまでの幾多の会盟<sup>(3)</sup>とは一線を画する効果を発揮したのである。



図1：9世紀前半のチベットとその周辺

に膾炙している「チベット」という名称を使用する。

- (2) チベット帝国をめぐる7世紀から9世紀までの中央アジア史については、佐藤 1977, 森安 1984, 森安 1987, Beckwith 1987a, Beckwith 1987b, 王 1992 等を参照されたい。
- (3) 特にチベットと唐とは、実現しただけでも7度会盟した。それぞれの会盟については、菅沼 2010, p. 30 の一覧表が便利である。またチベット、唐間の会盟とその前後の事情については佐藤 1977 の記述が最も参考になる。

この会盟の存在が知られるようになったのは比較的最近で、学界に紹介されたのは1980年代に入ってからである。しかしその発見は研究者の耳目を集め、現在に至るまでに関連研究が陸続と出版された<sup>(4)</sup>。しかし私見によれば、検討すべき課題は今もなお数多く残っている。そもそも、この三国会盟が実際にどのように実現したのか、また各国がどのような意図をもって会盟に挑んだのか、さらに本会盟の歴史的意義については、いまだ詳細な分析がないのが現状である。

そこで本稿では、会盟の実態をチベット語、漢語史料に即して再検証するとともに、会盟の真の目的とその成立背景について考察したい。さらに、会盟がチベットの歴史に与えた影響を、主にチベット語史料から検討したい。なお、本稿に関連する地名については図1を参照されたい。

## 2. 問題の所在

三国会盟について現在知られている史料のうち、最も重要なものは敦煌チベット語文書『デガユツエル (bde ga g.yu tshal) 祈願文』(P.t.16+IOL Tib J 751) と、ソナムツェモ (Bsod nams rtse mo) 著1167年成立のチベット語文献『仏教入門』(*chos la 'jug pa'i sgo*) である。行論の都合上、まずはこの二種の史料を簡単に紹介しておこう。

『デガユツエル祈願文』には、当時青海地方に駐留していたチベット政府機関関係者や軍人たちによる、和平を祈願する願文がまとめられている<sup>(5)</sup>。貝葉写本であり、余白に記されたオリジナルの葉数によると、現存するのは第

(4) 関連する先行研究については次章を参照されたい。

(5) 本文書を最初に紹介したのは Thomas (1951, pp.92-104) である。Thomas の研究した文書は IOL Tib J 751 のみであったが、その後接続する文書 P.t. 16 が発見され、両文書の写真が合わせて公開された (Spanien and Imaeda 1978, pls. 7-16)。その後の研究史と関連史料については、Uebach 1991, Kapstein 2004, Kapstein 2009, 黄 2007, 黄 2009 などを参照せよ。なお、『デガユツエル祈願文』に類似するチベット文一行が、Or. 8210/S. 5227 verso にある。Cf. Iwao *et al.* 2012, p. 65.

22～41 葉のみである。願文の内容によると、チベット、唐、ウイグルなどの国家が、ヤルモタン (dbyar mo thang) のデガユツエル (de ga g.yu tshal) にある会盟平原 (mjal dum thang) というところで会盟を行い、その成就を記念して当地に石碑と寺院が建立されたという。

もう一つの史料である『仏教入門』は基本的に仏教概説書であるが、その最終章が教法史であり、次のような記述が現れる (同書 nga 316a2-3)。

デン【カ・ペルギヨンテン】や大臣のシャン・チスムジェ (Zhang khri sum rje), 【バー・ギャルトレ】タクニャ<sup>(6)</sup>たちは唐 (brgya)<sup>(7)</sup>やウイグル (drug)<sup>(8)</sup>を恐れさせ、会盟することを受諾させた (chus gson)<sup>(9)</sup>。壬寅 (822) 年に唐 (rgya) と会盟して、癸卯 (823) 年にウイグル (lit. ホル)<sup>(10)</sup>と会盟して (後略)<sup>(11)</sup>。

(6) 史料上に現れる各人名の同定については、Szerb 1983, pp. 381-382 を参照せよ。

(7) brgya は Szerb (1983, p. 381) の示す通り rgya (=中国あるいは漢人) の異綴であろう。引用箇所では明らかに唐を指す。

(8) drug (～dru gu) が Türk のチベット語音写であることは Pelliot (1914, p. 144, n. 1) 以来しばしば指摘されてきた。また森安 (1977, p. 16) が指摘するとおり、drug は一つの集団を指すのではなく、いわゆるチュルク族一般を指す語であることは明らかである。さらに、古代チベット人たちがウイグルを drug と呼んでいたことについては、敦煌文書 P. ch. 2762 によって在証される (森安 1977, p. 38)。以上のことからして、引用文献に現れる drug はウイグルと解釈すべきであろう。なお『仏教入門』の該当箇所を訳した Szerb (1983, p. 381 特に n. 52) は、上記の drug に関する考察には触れないものの、drug と直後に現れる hor をいずれもウイグルだとみる。

(9) chus gson は未詳の語である。今 Szerb (1983, p. 381, n. 49) の解釈 “forced them to accept” に従った。

(10) ホル (hor) とはチベットからみておよそ北方に居住する異民族を指し、その具体的な集団は時代によって変遷した。ホルの指す民族集団の変遷については森安 (1977, p. 48) が詳しく考証しており、特に 8 世紀末から 9 世紀にかけてのホルは特にウイグルを指すと結論している。この結論に従うと、引用文献中のホルはウイグルということになる。前注でも述べたように、Szerb (1983, p. 381) もホル＝ウイグルとみる。

(11) bran blon chen po zhang khri sum rje stag snya la sogs pa brgya dang drug spa

サキヤ派初期の学者は古代期の史料を有していた可能性が高いというのが Tucci (1971, pp. 127-135) の指摘するところであるが、作者ソナムツェモはそのような古代期史料を用いて上記の記述を行ったと考えられる (Szerb 1983, p. 382)。

以上の二史料が、三国会盟研究の根本史料である。両史料の記述を比較検討して、チベットとウイグルとの会盟の存在を初めて学界に紹介したのが、山口 (1980, p. 221; 1981, pp. 28, 34) である。特に後者において山口は『デガツツェル祈願文』の存在に注目し、それが「唐、ウイグル、チベットの三国会盟を記念する和平祈念の願文集」(同 p. 28) である、と指摘した。また、その願文集の内容から、「三国会盟が行われた際に石柱碑と寺院が建立され」、その寺院は「大吉祥国テカツツェルの会盟原」に建立されたと指摘した。さらに山口は『仏教入門』に依拠して、この三国会盟の時期は 823 年である、とした<sup>(12)</sup>。

山口氏の指摘と別に、Szerb (1983) は『仏教入門』における三国会盟に関係する箇所を訳注し、822 年にチベットと唐が、823 年にチベットとウイグルが会盟を行ったこと、822 年のチベット―唐の会盟とは、すなわち 821 年から 822 年にかけて実現した長慶会盟のことを指す、と指摘した<sup>(13)</sup>。ここにおいて、山口、Szerb 両氏はそれぞれ独自にチベット語二史料に注目して三国会盟の存在を明らかにしたのである。

その後、森安 (1987) が、三国会盟に言及する史料はチベット文だけではなく漢文にも存在することを見出した。敦煌文書 P. ch. 3829 のなかに「[...] 国盟誓、得使三国和好」という語を見出し、上述の三国会盟と関係があるに違いないと指摘したのであるが (森安 1987, pp. 57, 67, n. 20)、残念ながら P. ch. 3829

---

↘ bkong nas mjal dum chus gson te/chu pho stag gi lo la rgya dang mjal dum bgyis/chu mo yos bu'i lo la hor dang mjal dum bgyis te

(12) なお山口 (1980, p. 225, n. 3) ではその年代を 843 年であるとするが、823 年の誤植か。

(13) なお、以降のチベット史書においては、三国会盟の記録が形を変えつつも伝わり続けられる。関係するチベット語史料は、Uebach 1991 が網羅的に収集しているので、参照されたい。

は上段が欠損しており文脈が明らかでない憾みがあった。しかしその後、李 (1997) が P. ch. 3829 と接続する断片 Dx. 1462 をサンクト・ペテルブルク東方写本研究所所蔵敦煌コレクションの中から発見するに及び、問題の箇所は「皇考君，論乞利陁欽臨波任宰相幕府兼度支使，專知蕃漢廻紇三国盟誓，得使三国和好」(第8行：李 1997, p. 280) と読むことができること、この盟誓を専知したのが論乞利陁欽臨波なるチベット官人であることが明らかになったのである。

次に、三国会盟に関連する議論の対象になったのが、寺院が建立されたデガユツェルの位置比定、そして南詔 (‘jang) がこの会盟に参加したか否か、である。

デガユツェルの位置について有力な説は今のところ二種あり、Kapstein 2009 (Kapstein 2004 の改訂版) の安西榆林窟第 25 窟＝デガユツェル寺院説、呉 (2007, pp. 421-422)・黄 (2009, pp. 98-99) の成州同谷県説がある。ただしこの問題については紙幅の都合上本稿では言及せず、別稿で検討することにした。

一方で、もう一つの南詔参加問題については本稿の関心とも関係するので、少し詳しく説明したい。『デガユツェル祈願文』には中国、ウイグルと会盟を結んだとある一方で、中国、ウイグルに並び南詔が時折言及される。先行研究はこの問題について必ずしも詳細な議論を尽くしているわけではなく、例えば山口 (1981) は『仏教入門』の記述にもとづいてチベット、中国、ウイグルの三国会盟であると述べるのみであるし、また Uebach 1991 は南詔もこの会盟に含む<sup>(14)</sup>。

この問題について積極的に意見を展開したのは黄 (2007, p. 66) である。黄の指摘するところによると、『デガユツェル祈願文』には、当時チベットと同盟を結んだ国として唐、ウイグルと並んで南詔も現れるものの、その出現回数は唐、ウイグルと比べると少なく、唐、ウイグルはそれぞれ 15 回現れるのに対し、南詔は 5 回しか現れない。そこから黄は、南詔は会盟には参加していないのではないか、と推断したのである。

(14) Uebach (1991, p. 502) は、唐、ウイグル、南詔以外の国家とも会盟したとみるが従えない。注(18)参照。

しかし、任（印刷中）<sup>(15)</sup>は黄に反駁し、南詔が5度現れる箇所ではすべてチベットが中国、ウイグル、南詔の三国を服従させたこととあることから、南詔もやはりこの会盟に参加した可能性があるという。さらに後代のチベット史書『賢者の喜宴』（*Mkhas pa'i dga' ston*, 1545-1564 年成立）に、チソンデツェン（*Khri srong lde brtsan*）のときに唐、ウイグル、南詔の三者が名宰相シャン・チスムジェ（*Zhang khri sum rje*）の計略によって一箇所で会盟を行ったとある記述がある（同書 p.400）と指摘する。また、『賢者の喜宴』の「勇猛三軍」がそれぞれ中国、ウイグル、南詔を対象としていること、また『漢藏史集』（*Rgya bod yig tshang*, p.198）中に言及される、上記の会盟後に辺境に配された「勇猛な九人」とは、まさにこの「勇猛三軍」と関係がある、と述べる。

以上が先行研究の主な展開である。まとめると、先行研究の流れは、チベット、ウイグル、唐の三国が一堂に会した会盟の存在はすでに疑いないものとした上で、ヤルモタンやデガユツェルの位置比定や南詔の参加問題に関心の中心が移ったとみることができよう。

しかしこの会盟およびその前後の事情については、不明確な部分も多々あり、その結果この会盟の歴史的評価はいまだ定まっていない感がある。そこで本稿では、次にあげる三つの問題を検討することを通じて、本会盟の歴史的意義の一端を明らかにしたい。

まず、南詔参加問題について解決案を提示したい。黄（2007）、任（印刷中）両氏の議論はいずれにせよ間接的な証拠に基づくものであり、『デガユツェル祈願文』の内容それ自体に立脚するものではない。本稿では、『デガユツェル祈願文』のテキスト内容からこの問題の解決案を示したい。

次に取り上げる問題は、三国会盟の実態である。今でこそ有名になった三国会盟であるが、実際にはどのように実現したのか、実は明確には解明されていないのである。特に、三国会盟と同時期に行われたチベットー唐の長慶会盟（821・822 年）は、会盟実現を記念して唐蕃会盟碑が建立されたことから史

(15) 任小波博士（復旦大学）は、筆者に印刷中の御論考を閲読し引用することを許可してくださった。ここに記して謝す。



上に有名であるが、この長慶会盟と三国会盟との関係についていまだ明確な共通理解はない。というのも、三国会盟はチベット、唐、ウイグルの三国間で行われたとされるが、長慶会盟はチベット、唐の二国間会盟なのであり、そもそも両者が同一の事柄なのか、疑問が残る。例えば Uebach (1991, p. 497) や森安 (2007, pp. 350-351) は長慶会盟を三国会盟の一部と認識するが<sup>5</sup>、山口 (1980, p. 221) は長慶会盟の後で三国会盟が別個に実施された、と考えているのである。では、両者の関係は如何なるものなのか、また、三国会盟とは実際には何を意味するのか、再度確認する必要があるだろう。

最後に、この会盟がチベットに与えた影響について考察したい。当時の三大国家が会盟し、結果として平和が齎されたことは、9世紀のユーラシア東部史上、一大画期となる出来事である。では、当時の人々にとってこの会盟は如何なる意味をもっていたのか、特にチベット帝国側の認識については未だ検討されたことがない。

以上の三つの課題について、以下でそれぞれ検討したい。

### 3. 南詔との会盟

まずは南詔参加問題について検討してみよう。実は、この問題は簡単に解決できる、と筆者は考える。『デガユツェル祈願文』中の一文に、

デガユツェルの会盟平原において、誓いの寺院を建てましたのは、両年  
間において三大国家が会盟し、大いなる誓いをなさった場所であって<sup>(16)</sup>、  
(後略) (『デガユツェル祈願文』 f37b2-3)

とあることに注目したい。この文は、幾つかの点において重要であり詳細に分

(16) de ga g.yu tshal mjal dum thang du gtsigs kyI gtsug lag khang mdzad pa'dI yang  
lo ngo gnyis la rgyal khams chen po gsum mjal dum ba dang gtsigs chen po mdzad  
pa'I sa gzhI ste

析すべきであるが、まず検討したいのは、「三大国家」(rgyal khams chem po gsum) なる語である。この三大国家とは具体的に何を指すのか。

楊 (2008, p. 151) は、この三大国家の内訳を唐、ウイグル、チベットであると断定している。しかし、『デガユツェル祈願文』における「三大国家」の用例をみると、該当箇所以外に 2 例ある (f38b3, f39b2)。そしてその二例には

f38b3 : 三大国家である唐、ウイグル<sup>(17)</sup>と南詔 (rgya drug dang 'jang rgyal khams chen po gsum)

f39b2 : 敵で、三大国家である唐、ウイグル、南詔 (dgra rgya drug 'jang rgyal khams chen po gsum)

とある。したがって、本文書における「三大国家」の内訳は、共通して唐、ウイグル、南詔と考えるべきである。つまり先に引用した一文に言う三大国家とは唐、ウイグル、南詔なのである<sup>(18)</sup>。

なおこの機会にフランス国立図書館所蔵敦煌チベット語文書 P. t. 1190 (手紙文書?) に触れておきたい。本文書は従来全く注目されていなかったが、実は第 5 行に「唐、ウイグル、南詔の三[国]を全て調停して」(rgya drug 'jang sum spyI sdums) と読み得る箇所がある。この箇所が上記の三大国家との会盟と関連することは明らかであろう。本文書全体の解釈については今後更なる検討が必要だが、チベットが三国と同時に会盟したことの傍証として提示しておきたい。

ではなぜ、『デガユツェル祈願文』において、南詔の登場回数は唐、ウイグ

(17) rgya を唐, drug をウイグルと解釈することについては、注(7)及び注(8)を参照されたい。

(18) なお Uebach (1991, p. 502) は、この会盟に唐、ウイグル、南詔以外の国家も参加した、とみる。『デガユツェル祈願文』(33b3) に rgya drug dang 'jang las stsogs pha (唐、ウイグル、南詔など) とあるうちの las stsogs pha を文字通り “etc.” (Uebach 1991, p. 497) と解釈したからである。しかし『デガユツェル祈願文』に「三大国家が会盟し」と限定して記述している以上、その他の国家との会盟は存在しなかったとみるべきであろう。

ルよりも少ないのであろうか。また『吐蕃論董勃藏修伽藍功德記』においては「蕃漢廻紇三国盟誓」としてチベット、唐、ウイグルのみを列挙し、南詔が明らかに無視されているのはなぜか。さらに『仏教入門』においても南詔との会盟が記録に残っていないのはなぜか。

その理由は、4.3において述べるように、当時のチベットにおける主要な懸念はあくまで唐とウイグルであって、彼らと会盟することが主目的であったということにある、と筆者は考える。南詔との会盟は結局のところ副次的な目的であって、その結果、チベットの会盟の主要な相手である唐とウイグルが繰り返し言及されたのに対し、南詔は時折省略されてしまったのであろう。

いずれにせよ、この会盟はチベットと三大国家（唐、ウイグル、南詔）の間で実現したものであり、合計にして四カ国が参加したことになる。つまり、より厳密には「四国会盟」なのである。そこで本稿ではこれ以降、三国会盟という呼称は止め、代わりに四国会盟と呼ぶことにする。

#### 4. 会盟の実態

本章で検討するのは四国会盟の実態であるが、議論の前提として、まずは会盟に参加した各国における関係史料の残存状況を確認しておきたい。

##### 4.1 史料残存の偏差

四国会盟は9世紀のユーラシア東部における大国の間で実現したものであり、各国にとって画期的な事件であったことは想像に難くない。前章までに度々言及してきたとおり『デガユツェル祈願文』と『仏教入門』は、前者が同時代資料であり後者は後代の史書であるという違いはあるものの、いずれもチベット側でこの会盟の成功を伝えた史料であり、また Uebach (1991) が詳細に論じたとおり、会盟の様子は様々な補足や記述の混乱により形を大きく変えつつも、チベット語史書に伝え続けられた。つまり、チベットではこの会盟は歴史上の重大事件として記憶され続けたのである。

では、他の国家における記録についてはどうか。森安 (2007, p. 351) が「そ

れ（＝三国会盟。筆者補足）に言及した史料が唐にもウイグルにも見つからない」と指摘したとおり、奇妙にも全く見つからないのである。同書において森安（2007, p. 531）がさらに指摘するとおり、チベット語以外で四国会盟に言及する史料には、唯一敦煌漢語文書『吐蕃論董勒藏修伽藍功德記』があるのみである。しかし、この文書が9世紀前半、チベット支配下の敦煌で記されたのは間違いないし、またその内容もチベットの軍人一家の来歴であることからすると、チベット側の立場に立って記されたチベット側の史料であることは明白であろう。

ここで注意すべきは、会盟国の一つである唐側の史料においては、四国会盟自体について全く言及がない代わりに、チベット－唐間の長慶会盟の成立事情についての詳細な記録が残るということである<sup>(19)</sup>。なお、ウイグル側の史料にも、会盟に関する記述は今のところ見つかっていない<sup>(20)</sup>。ウイグルに関しては、元々文字史料自体が少ないということが理由である可能性もあるが、四国会盟のような重要な事柄について、唐側に二国間同盟に関する史料しか残らなかったのは奇妙である。では、このような事態は、如何なる状況によるものであろうか。この問題を解決するため、次節では、四国会盟の実態を『デガユツェル祈願文』に即して考察したい。

## 4.2 会盟は同時に行われたか

会盟の実態についての重要な記述が『デガユツェル祈願文』に存在する。それは、先ほど引用した同文書 f37b2-3 に現れる

(19) 例えば『新唐書』巻216下吐蕃伝下（pp. 6102-6104）には、長慶会盟の前後事情や入蕃会盟使劉元鼎の詳細な入蕃記録が引用される。

(20) 森安・吉田1998/99: 163-65は、オルホン河流域とエチナ河流域の間、セブレイ＝ソム付近に現存するセブレイ碑文（ルーン文とソグド文）がチベット・ウイグル会盟時に両国の国境に建てられたものであると推定する。ただしその推定は碑文テキストに依拠したものではなく、碑文の所在地から導き出されたものである。なお、テキストは摩耗してほとんど読めない。Cf. 森安・オチル1999, pp. 225-227.

両年間に於いて三大国家が會盟し、大いなる誓いをなした場所であつて<sup>(21)</sup>

というくだりである。ここで問題としたいのが、文中に現れる「両年間」(lo gnyis)の具体的な意味である。想起すべきは、先に引用した『仏教入門』の、822年に唐と、823年にウイグルと會盟を結んだという記述である。『デガユツェル祈願文』にある「両年間」とは、明らかにこの『仏教入門』に記録された、二つの會盟の年である822・823年を指している。したがって、三大国家が會盟したのは822・823年ということになる。そこで、『デガユツェル祈願文』にいう両年間の會盟とは、まさしく『仏教入門』に言う822・823年の唐、ウイグルとチベットとの會盟と同一であることが改めて確認できるのである。

唐側の史料にも傍証がある。長慶會盟は821年10月10日にまず唐の長安郊外で儀式が行われ(『旧唐書』卷196下吐蕃伝下, p.5264)、次に822年5月6日にチベットで儀式が行われている(『唐會要』卷97吐蕃, pp.1738-1739, 『旧唐書』卷196下吐蕃伝下, p.5265)。すると、チベットと唐の會盟が最終的に締結したのは822年であつて、これは『仏教入門』に云う822年の會盟のみならず、『デガユツェル祈願文』に現れる會盟とも年次が一致するのである。

さて、上記のような一致によって、新たな検討課題が生じる。上に引用した『仏教入門』の記述が示唆するのは、チベットは唐、ウイグルと一堂に會して盟を結んだのではなく、むしろ唐、ウイグルと個別に會盟したということである。言い換えると、『デガユツェル祈願文』の「両年間」が『仏教入門』の二年と同一であつたとすれば、『デガユツェル祈願文』の四国会盟とは、実は大国が一堂に集まって一度に會盟したことを意味するのではなく、複数の二国会盟で構成されてゐたと考えなければならないのである。

ただし、『デガユツェル祈願文』中の次の一箇所には注意を要する。

大国の唐、ウイグル、南詔などを〔チベットの〕ご命令のもとに同じ時期

(21) 原文は注(16)を参照せよ。

に集めて、会盟の大いなる誓いを制定し、(後略)<sup>(22)</sup>

『デガユツェル祈願文』(f33b2)

チベットは唐、ウイグル、南詔を「同じ時期」(dus gcig)に集めて会盟の誓いをした、と記される。では、この「同じ時期」とは、同時に四国が一所に集まったということなのだろうか。しかし、上記のように「両年間」とあるからには、そのような解釈は成り立たない。そうすると、この「同じ時期」とは文字どおりの同一日時というよりは、よりタイムスパンの長い一定の時期という意味で使われていると考えざるを得ないのである。『デガユツェル祈願文』の他の箇所において件の諸国が「一時に集合した」という記述は全くみあたらないことにも留意すべきであろう<sup>(23)</sup>。

では、なぜ『デガユツェル祈願文』においてこれら複数の会盟が、「同じ時期」会盟したと記されたのか。また、前章で述べたような残存史料の偏差——チベット側のみに四国会盟の記録が残り、唐側には二国間会盟である長慶会盟のみしか記録が残っていない——が何故生じたのか。以上の二つの疑問を解明するために、四国会盟が成立するまでの歴史的背景を振り返ってみたい。

#### 4.3 会盟にいたるまでの経緯

7世紀初頭以降に對外進出を始めたチベットが東の唐、北の突厥(後にウイグル)、西のアッバース朝と中央アジアの覇権を争った経緯についてはすでに佐藤 1977、森安 1984、森安 1987、Beckwith 1987a、Beckwith 1987b、王 1992等の優れた論考があるのでここでは繰り返さないが、行論の都合上、本

(22) rgyal po chen po rgya drug dang 'jang las stsogs pha bka' 'og du dus gcig du 'dus te/mjal dum gyI gtsigs chen po bcas te/

(23) 黄(2009, p. 98)は、26b1-27a1を引用し、その一部分を「与唐、回鶻一同盟誓」と訳しているが、これは意識というべきである。対応する原文はrgya drug tang chab srId gcig du mjal pa'I tshigs bcas nasであり、厳密には「唐、ウイグルと御政道の一つに合わせた誓いを制定して」と訳すべきであって、決して「一同」と解釈できるわけではないのである。

稿では 780 年代以降に唐が開始した対チベット包囲作戦について、佐藤 (1977) の優れた叙述に主に依拠しつつ簡単に振り返りたい。

755 年の安史の乱以降、中央アジアから隴右にいたるまでの地域のヘゲモニーを握ったのは、チベットであった。チベットの優位はおよそ 780 年から 783 年にかけて行われた清水会盟まで続くが、唐の宰相李泌の提唱する対チベット作戦が徳宗に容れられるに及び、チベットの優位性はゆらぎ出す。李泌の作戦とは、「回紇、大食、雲南と結び与に共に吐蕃を図り、吐蕃をして備うる所の者多からしめんと欲」<sup>(24)</sup>し (『通鑑』巻 233 貞元三 (787) 年七月条, p. 7495), また「北は回紇と和し、南は雲南と通じ、西は大食・天竺と結び、此の如くすれば則ち吐蕃自ずと困」<sup>(25)</sup>ずることを目指す (『通鑑』巻 233 貞元三年九月条, p. 7502), というものであった。佐藤 (1977, p. 696) が「李泌コース」と呼ぶこの作戦は、少なくともウイグル、南詔を唐へ接近させることになり、チベットはこれらの三国に包囲されることになる。788 年の咸安公主のウイグルへの降嫁実現以降、李泌自身は死去した (799 年) にも拘らず、その政策自体は着実に実行され、チベットは靈朔方面、四川～雲南方面のいずれにおいても形勢不利になった。それに先立つ 10 年ほど前、すでに中央アジア方面においてチベットの勢力は不振となっていた。788 年から 792 年にかけて、北庭をめぐるウイグルとの戦闘に敗北したチベットは、その中央アジアにおける版図をタリム盆地南辺の諸オアシス都市に限定せざるを得なかったのである (森安 1978)。

801 年、劍南節度使の韋臯がチベットの内大相・論莽熱率いる 10 万の軍隊 (『旧唐書』吐蕃伝下, p. 5261) を待ち伏せ攻撃し、チベット軍のおよそ半分を殺しかつ論莽熱を捕虜にしたのが決定的となり、チベットは唐と和平の道を探りだした<sup>(26)</sup>。803 年には論頼熱が使者として長安を訪れたのを皮切りに、804 年、805 年、810 年にチベットの使者が来唐し<sup>(27)</sup>、また『旧唐書』吐蕃伝下 (p.

(24) 欲結回紇、大食、雲南与共図吐蕃、令吐蕃所備者多。

(25) 北和回紇、南通雲南、西結大食・天竺、如此則吐蕃自困

(26) この間の事情は『旧唐書』巻 140 卷韋臯伝 (p. 3823) と『旧唐書』巻 196 下吐蕃伝下 (pp. 5259-5261) に詳しい。Cf. 佐藤 1977, pp. 684-686.

(27) 佐藤 1977, p. 686.

5261) には「〔元和〕六年より十年に至るまで、〔チベットは〕使を遣わし朝貢すること絶えず」(六年至十年, 遣使朝貢不絶)とあるから、815(元和10)年にいたるまで、チベットは唐に対して平和路線をとったのである。

815年に時のツェンポであるチデソンツェン(Khri lde srong brtsan)が没し、幼少のチツクデツェン(Khri gtsug lde brtsan)が即位すると、818年10月に宥州、鳳翔を包囲したのを皮切りに、主にオルドス方面のチベット軍の動きが活発になるが<sup>(28)</sup>、攻撃が不調だとみるや、チベットは一転して再度和平路線をとるようになった。821(長慶元)年9月にチベットの使いが長安に到り和を請い、時の唐の皇帝穆宗はこれを受け入れて、ようやく会盟が成立したのであった<sup>(29)</sup>。821年と822年、長安郊外とラサ郊外でそれぞれ会盟の儀式が行われた後、823年に会盟を記念した石碑が長安とラサに建てられた(唐蕃会盟碑)<sup>(30)</sup>。いわゆる長慶会盟である。そして長慶会盟とほぼ同時期に、チベットとウイグル、そして南詔とも会盟したことが、中央アジア出土文書やチベット語文献の研究から明らかにされたのである。

以上のような歴史的背景を踏まえると、チベットが四国会盟を企画し実現するに至った外交的意図は明らかであろう。チベットが会盟の相手として選んだ国の唐、ウイグル、そして南詔は、すべて唐のチベット包囲作戦に協力する

(28) 佐藤 1977, pp. 689–691.

(29) ただし、オルドス方面では引き続き緊張状態が続いていた。821年10月、靈武節度使李進誠が大石山(胡註によると魯州の東南)でチベットの三千騎を破ったと奏する(『通鑑』巻242, 長慶元年十月条, p. 7802)。魯州はいわゆる六胡州の一つであり、「何府君墓誌銘」によれば現在の寧夏回族自治区塩池県付近にあたる(寧夏回族自治区博物館 1988, 森部 2010, pp. 100–101)。また『旧唐書』巻195 迴紇伝(p. 5212)所引の豊州刺史李裕の奏によると、821年11月、唐がウイグルに太和公主を降嫁した際、チベットの襲撃を警戒したウイグルは、柳泉(豊州付近か。cf. Beckwith 1987a, p. 167)に三千騎を駐留させている。

(30) 唐蕃会盟碑東面第66–67行(佐藤 1977, pp. 921, 925, 王 1982, pp. 38, 43–44, Richardson 1985, pp. 116–117, Li and Coblin 1987, pp. 51, 99, Iwao *et al.* 2009, p. 37等)。この時に建てられた碑文のうち、現在するのはラサの石碑(すなわち唐蕃会盟碑)のみであり、長安郊外の石碑は失われた。なお筆者は前稿(Iwao 2013)にて唐蕃会盟碑が建立された意味を考察した。



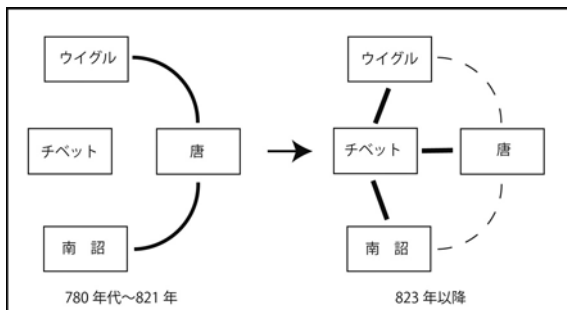


図2：四国会盟前後における国際関係の変化

国々なのであった（図2）。

しかしウイグルや南詔がチベットと再び同盟を結ぶということは、それまでチベットを封じ込めていた包囲網が崩れることを意味する。それは唐にとって外交的な敗北でもあり、さらにはウイグル—南詔—チベットの同盟が、唐にとって将来的な脅威になり得るはずである。少なくとも、李泌コースは完全な見直しを図らなければならず、もし唐側がチベットの外交方針に気付いたとなると、必ずや妨害作戦を図ったはずである。

このような事情はチベット側も認識していたようで、外交の全容が漏れないように陽動作戦を展開した節がある。長慶会盟に参加した唐の使節劉元鼎一行は、822年5月にラサ郊外で行われた会盟儀式に参加したのち、河州の大夏川に立ち寄った。そこで、彼らはチベットの宰相シャン・チスムジェ（Zhang khri sum rje, 尚綺心児）と出会った。注目すべきは、劉元鼎とシャン・チスムジェとの間で次のようなやり取りがあったことである。

初め、元鼎蕃中に往来し、並びに路に河州を経、其の都元帥・尚書令の尚綺心児に見ゆるに云う、「迴紇は小国也。我れ丙申年を以て磧を躐えて討逐し、其の城郭を去ること二日程にして、計到れば即ち破滅せん。会ま我れ本国に喪有るを聞きて還る。迴紇の弱きこと此の如く、而れども唐国を待すること我より厚きは、何ぞや」と。元鼎云う、「迴紇は国家に於いて救難の勲あり、而して又曾て分寸の土地をも侵奪せずんば、豈に厚く

せざるを得んや」と<sup>(31)</sup>。

(『旧唐書』卷196 下吐蕃伝下 p.5265)

シャン・チスムジェ<sup>(32)</sup>が劉元鼎に対して投げかけた、「ウイグルは小国であるのにどうして唐は厚遇するのか」という挑戦的な質問は、少なくともチベットの四国会盟の意図とは外れている。唐とウイグルとの良好な関係を揶揄したものであるとか(田坂 1940, p.186)、ウイグルの武力をシャン・チスムジェが低く評価していたという解釈(佐藤 1977, p.694)は、筆者にはやや一面的にみえる。というのも、彼は当時チベットの宰相という地位におり、チベットの外交方針を全く知らずにこのような迂闊な発言をしたとは考えられないのである。言い換えれば、彼の発言には何らかの意図が含まれていたと解釈するべきである。そしてその意図は、おそらくのところ、水面下ですでに進んでいるはずのチベットーウイグル間の和平交渉を悟られないようにするということにあったのではないか。劉元鼎はこの意図を見破ることができず、正面から返答するに至ったのである。

ここにおいて、チベットと唐の間における残存史料の偏差が示唆するものは明らかであろう。チベットから見た場合、822・823年における唐、ウイグル、南詔との会盟は、すべて一連の外交政策にもとづいていたのであり、だからこそチベット側の史料にはこれら会盟が一連のものとして認識されていた。ところが相手国(少なくとも唐)から見た場合、それはチベット一国との二国間の会盟に過ぎなかったのである。結果として唐側の史料には、長慶会盟についての記録こそ入蕃使の劉元鼎の行程を含み詳細に残ったものの、肝腎の四国会盟

(31) 初、元鼎往来蕃中，並路經河州，見其都元帥・尚書令尚綺心兒云，「迴紇，小国也。我以丙申年踰磧討逐，去其城郭二日程，計到即破滅矣。会我聞本国有喪而還。迴紇之弱如此，而唐国待之厚於我，何哉。」元鼎云「迴紇於国家有救難之勲，而又不曾侵奪分寸土地，豈得不厚乎。」

(32) 『新唐書』卷216 下吐蕃伝下には同様の記事があり、尚塔藏の発言とされているが、佐藤(1977, p.702, n.31)、山口(1980, p.202, n.6)に従い、『旧唐書』卷196 下吐蕃伝下の尚綺心兒を採用する。なお『冊府』卷981 外臣部盟誓(p.3926)でも同様の記事を載せ、さらに尚綺心兒と尚塔藏を同一人物と説明するが、佐藤(1977, pp.903-904, n.9)が指摘するとおり誤りである。

については全く伝えられなかったのであり、長慶会盟が大きな外交政策の一部であることに気づけなかったということになる。

以上のようにしてチベットの外交作戦は成功した。その後大規模な戦闘は勃発せず、ユーラシア東部には平和が訪れた。佐藤（1977, p.637）が長慶会盟を「両国間の関係を和平に導き、これより両国の間には戦闘が再発しなかったという意味で最も重要である」と意義付ける言葉は、そのまま四国会盟にも当てはまる評価ではある。一方、佐藤（1977, p.695）はさらに、チベット―唐の同盟は、結局のところ唐の対チベット包囲策が成功した結果である、と評するが、この点に関しては再考の余地がある。確かに佐藤の述べる通り、会盟の発端は唐のチベット包囲策の成功であり、その意味においては、チベットの行動は唐のチベット包囲策へのリアクションに過ぎない。しかし、同時に我々が見逃してはならないのは、一旦は唐に追い込まれたチベットが、外交的手段でもって危機を克服したばかりか、むしろ唐、ウイグル、南詔の三国間の外交主導権を唐から奪いとったということである。会盟によってもたらされた平和は結果としてわずか20年しか続かなかったが、それは外交的な失敗によるのではなく、840年代初めにウイグル、チベットが相次いで内部崩壊したことが原因なのである。

以上の考察をまとめておこう。『デガユツェル祈願文』の「兩年の間に三大国家が会盟し」というくだりは、三大国家の代表者が一堂に会して相互に会盟したという意味ではなく、822、823年の間に三大国家（唐、ウイグル、南詔）がチベットとそれぞれ会盟したという意味にとらなければならない。また、デガユツェル祈願文に現れる会盟とは、決して複数国家が一堂に会する類の会盟ではなく、チベットと他の国家との二国間同士が複数会盟したものを総称して指しており、長慶会盟は四国会盟の一部を構成したのであった。現在まで学界にて三国会盟と呼ばれたこの事件は実際には四国会盟であり、チベットのイニシアチブのもとに、チベットが各国それぞれ同盟を結んだ一連の外交政策なのであった。

そして兩年（822・823年）の間、チベットとは唐（822年）、ウイグル（823年）のみならず南詔とも会盟した。ただし南詔との会盟が822年あるいは823

年のどちらであるかは、今のところ不明である。そして 823 年以降 20 年間ユーラシア東部地域に訪れた平和期は、チベット帝国の主導によってもたらされた<sup>(33)</sup>。

## 5. 会盟がチベットに与えた影響

最後に、会盟がチベットに与えた影響について考察したい。822 年～823 年の外交的勝利は、『デガユツェル祈願文』などに記録されてチベット国内にて喧伝された<sup>(34)</sup>。この成功はまた、次に述べるようにチベットの内政にも大きな影響を与えたようである。

この時期のツェンポは 815 年に即位したばかりのチツクデツェンであり、また彼の傍らには高僧デンカ・ペルギヨンテン (Bran ka dpal gyi yon gtan) がいた。後代のチベット史書によると、チツクデツェンは持金剛の化身とされ熱心な仏教信者であった (『紅史』 p.39)。また、「仏法を宝であるとお考えになり、権力を僧に付与し、仏法の教規 (= 仏教者の法律) と王国の法律 (= 世俗の法律) の二つを確定した」 (『王統鏡』 pp.232-233)<sup>(35)</sup> ということなど、仏法を非常に尊んだ。『王統鏡』には次のようにある。

チベットの人民すべては十善戒に入れられ、盗み、強盗、詐欺などを行うことがなくなり、そこで仏法に反対する役人・庶民たちすべては、行動が

(33) 『新唐書』巻 216 下吐蕃下 (p.6104) には「贊普立幾三十年，病不事，委任大臣，故不能抗中国，辺候晏然」とあり、当時の辺境が平和であった理由を、ツェンポが病弱であって全てを大臣に任せた結果、当時のチベットは中国に対抗し得なかったと説明するが、少なくともチベット語史料にはそのような事情を伝える記録はない。

(34) ラサに現存する唐蕃会盟碑立も、会盟成立を顕彰するモニュメントとして理解するべきであろう。ただしこの碑は四国会盟全体を顕彰しておらず、あくまでもチベットー唐の二国間会盟の顕彰が主眼である。Cf. Iwao 2013.

(35) sangs rgyas kyi bstan pa rin po che la dgongs nas/dbang dge 'dun la gtad/chos khrims dang/rgyal khrims gnyis gtan la phab/

非常に制限されてしまった。そこで民たちは「我々がこんな風に行動を制限されるのは、何故だ。」とお互いに言い合い、「それは、こいつらのせいだ」と言って、僧たちを指差して白眼視した。それを王がお聞きになって、「私の出家者たちを指差して白眼視するのは道理ではない。そこで、以後【そのように】した者はすべて目をくりぬき指を切れ」とおっしゃった。そのように王が仏法を極端に信奉しているのを、バー・タクナチェンなど罪深い大臣たちは大変に嫌っていた<sup>(36)</sup>。 (『王統鏡』 p. 233)

この逸話がそのまま事実かどうかは措くとしても、『王統鏡』をはじめとするチベット史書は仏教史である以上、仏教の弘通を賞賛するのが普通であろう。しかし、ことチツクデツェンに関しては仏教への傾倒が極端であると記されるということは、それに類する事実があったのであろう。実際に、前ツェンポのチデソンツェンの時代からチツクデツェンの統治期にかけて、宰相など並み居る高級官僚を抑え、僧であるはずのデンカ・ベルギヨンテンが政治に介入していたのである(佐藤 1977, p. 781)。ベルギヨンテンの政治への参入と、チツクデツェン自身の仏教への信奉とは無関係ではあるまい<sup>(37)</sup>。

チツクデツェン時代に行われた仏教事業は、先述したデガユツェル寺院の建設の他に、敦煌文書などの同時代史料で在証される。

(36) bod 'bangs thams cad dge ba bcu'i khirms la bkod de/rku dang/jag dang/g.yo zol sogs byed pa med par gyur nas/blon 'bangs chos la mi dga' ba thams cad spyod pa shin tu dog par gyur to//de nas 'bangs rnams kyis nged rang rnams 'di tsam pa'i spyod pa dog pa 'di gang gis lan zhes gcig la gcig gis smras pa dang/de dag ni 'di gang gis lan no zer te/btsun pa rnams la mdzub mo gtad nas/mig ngan bltas pas/rgyal pos gsan te/nga'i rab tu byung ba rnams la sdigs mdzub gtad nas mig ngan lta bar mi rigs pas/da phyis sus byas na'ang mig phyung la mdzub mo chod cig gsungs so//de ltar rgyal po chos la shin tu dkar ba de la/sbas stag rna can la sogs pa sdig blon rnams shin tu ma dga' nas/ 同様の話は『賢者の喜宴』(pp. 420-421)などにも見える。

(37) なお、『王統鏡』(pp. 233-234)によると、その後バー・タクナチェンたちは僧デンカ・ベルギヨンテンと王妃が不倫の関係にあると噂を流してベルギヨンテンを殺し、チツクデツェンに米酒をすすめて酔わせ、絞殺したという。

# ① 『大乘經纂要義』の發布

『大乘經纂要義』敦煌文書の中には、漢語版とチベット語版の二種類が確認される。漢語版についてはこれまでに P. ch. 2298, S. 3966, S. 553 の三点が確認される（上山 1985 : 1990, p. 314）。チベット語版は中国に保管されているという報告があるものの（黄 1978, p. 59）、管見の限りそのテキストはまだ公開されていない。人身の得難きこと、因果応報のことわり、三宝への帰依をすすめるなど平易な内容をもつ、一般民衆を対象にした文献であり、仏教書としては通俗的なものである。本稿の関心からみて特に重要なのは、同経漢語版の S. 3966 の奥書に「壬寅年六月、大蕃国有讚普印信并此十善經本伝流諸州流行読頌。後八月十六写畢記」とあることである。奥書の壬寅年は、チベットの敦煌支配時期が 787 年から 848 年であることを考慮すると、822 年であることは間違いない（上山 1990, p. 315）。そこで、同経が 822 年 6 月にツェンポのチツクデツェンの勅令（印信）を付けて領土内に頒布されたことがわかる。

ここで注意したいのは、頒布の前月である 5 月 6 日にラサ郊外にて会盟の儀式が行われていることである。このタイミングで同経がチベット帝国内に頒布されたのは決して偶然ではあるまい。また、同経の漢語版は今まで敦煌から見つかっているだけでも三点ある。チベット帝国内における敦煌は、仏教教法的にこそ高い位置づけにあるものの、チベット帝国内における支配秩序からすると最下層かつ辺境地域にあたる。しかし敦煌にいたるまで同経が到達していたことを考慮すると、同経が当時チベット帝国内に大規模かつ広範に頒布されたことは容易に想像することができよう。

なお、本経には『大乘經纂要義』という題が付されるが、一方で上述の S. 3966 奥書では「十善經本」とも呼ばれる。『王統鏡』（p. 233）にはチツクデツェンの治世時の出来事として「チベットの人民すべては十善戒に入れられ、盗み、強盗、詐欺などを行うことがなくなり」<sup>(38)</sup>とある。この「十善戒に入れられ」という出来事とは、「十善經本」の頒布のことを指すのかもしれない<sup>(39)</sup>。

(38) 原文は注(36)を参照。

(39) なお本経が『十善經本』と呼ばれることに関して、上山（1985, p. 488）はこの

## ② 十万頌般若経と大般若経の大量写経

会盟後に行われたと思われる仏教事業の一つに挙げられるのが、敦煌におけるチベット文十万頌般若経と漢文大般若経の大量写経である。敦煌出土チベット文文書のうち、その大半を占めるのが十万頌般若経と、次に述べる無量寿宗要経であり、また、漢文文書の大半を占めるのはこの時期に写された大般若経である。チベットの支配下に入った敦煌では写経所が設立され、そこで同経が大量に写経されたのである。上山（1988, p.195）によると、その写経所の規模は我が国の奈良朝の写経の10倍にたった。

同経を写すにあたり、まずチベット本土（おそらくチベット第一の官寺であるサムイエ僧院）から見本となる経典が送付され、その見本を一回り小さくする形で同経が大量に写された<sup>(40)</sup>。完成した分は、敦煌からチベット本土を含む他の地域に送付された。最近チベット自治区にて敦煌写経の十万頌般若経が数点発見されたが、これらはすべて上述のような次第で各地に到達した後、現在まで収蔵されていたのである<sup>(41)</sup>。

この写経事業が正確に何時から始まったのかはいまだ明らかではないが、藤枝晃（1961, p.277）が指摘するとおり、これほどの大規模な写経事業がなされたのが仏教推進に熱心であったチツクデツェンの治世にかかることは間違いなからう。さらに、同経の用紙支出に関する敦煌出土チベット語文書 IOL Tib J 1359 (A)-(D) (=Ch.73 xv.5=vol. 69, fols. 53-56: Thomas 1951 pp. 80-84) には午年と未年の紀年が現れるが、藤枝（1961, p.277）はこれらを826・827年か、

ㄨ 経典の発布がソンツェンガムポ（Srong brtsan sgam po）の事績としてプトン（Bu ston rin chen grub）の『仏教史』などに「十善の法律を定めた」（dge ba bcu'i khriims bcas）と記す事項に当たるものではないか、と推察されている。ソンツェンガムポとチツクデツェンの治世には2世紀の年代差があり、簡単に二件を同一視してよいものか疑問であるが、上山は「後の史家がこの王（＝ソンツェンガムポ、筆者注）の仏教的業績を強調するため、潤色・仮託した可能性が強い」（同 p.488）とする。

(40) Lalou 1954, Iwao 2012 を参照せよ。

(41) チベットで発見された敦煌十万頌般若経については、Ska ba 2009, 馬 2009, 張 2010 を参照せよ。

さもなくば 838・839 年とみた。この紀年にはすでに写経事業が行われているのであるから、実際にはこれらの紀年以前に事業が開始されたはずである。では、826・827 年と 838・839 年のいずれが妥当であるか、歴史的背景を考慮して判断してみよう。そもそも十万頌般若経と大般若経は非常に大部の經典である。かつそれらを敦煌で何部も写経し、そしてそれをチベット帝国の各地に配分するというのは、途方も無い一大事業であり、きっかけもなく突然始まったとは考え難い。以上のような前提のもとで兩年代を比較すると、838・839 年の以前には特に重要な事件が起こっていないのに対し、826・827 年の数年前である 823 年には四国会盟が成立しているのである。以上のような状況を考え合わせると、十万頌般若経写経事業は、四国会盟成立を受けて 823 年後に始まったとみるのが最も妥当であろう。

### ③ 仏教目録の編纂

9 世紀に入るとチベットでは翻訳済みあるいは翻訳中の仏典の目録が三種作成され、編纂された場所に依じて各自に名前が付けられた。『デンカルマ目録』(*dkar chag ldan dkar ma*)、『パンタンマ目録』(*dkar chag 'phang thang ma*)、『チンプマ目録』(*dkar chag 'ching phu ma*) である。このうち、チベット大蔵経に入った『デンカルマ目録』のみが伝世し、後の二種は失われたと考えられてきた。しかし近年『パンタンマ目録』の写本がラサで発見され、2003 年に活字版が出版されたことによって、当該目録の研究は飛躍的に進展したのである<sup>(42)</sup>。

それら三種の仏典目録の編纂年代については、最も古いものが『デンカルマ目録』であると考えられてきた。同目録の末尾には、辰年に編纂されたことが明記されており、この辰年をめぐっては種々の説があるが、山口 (1985)、Rabsel (1996) は 824 年説を支持する。しかし、新たに出版された『パンタンマ目録』を詳細に検討した川越 (2005a, p. 126) は、『デンカルマ目録』の多数の典籍が『パンタンマ目録』に確認されないこと等を指摘し、両目録の前後関

(42) 中国から『パンタンマ目録』が出版されると、これを利用した研究が矢継ぎ早に現れた：Halkias 2004, 川越 2005a, 川越 2005b, Herrmann-Pfandt 2008。



係について 824 年説に疑義を呈した。さらに西沢（2011, p. 64）は川越の研究を参考にしつつ両目録の内容を比較検討した結果、『パンタンマ目録』の方が『デンカルマ目録』より早くに成立したと結論づけ、さらに『パンタンマ目録』の成立を 830 年、『デンカルマ目録』の成立を 836 年であると決定したのである。

西沢説に従うと、最古の目録である『パンタンマ目録』は 830 年に成立したことになる。この紀年はチツクデツェンの治世中であり、さらには会盟が成立してから 7 年後にあたる。これは決して偶然ではなく、会盟成立によって仏教推進派の優勢が決定的になった時期に、今まで断続的に翻訳されてきた仏典類の目録が本格的にまとめられるに至ったと解釈することができるのではないか。

以上、3 点にわたり、四国会盟以降のチベットにおける仏教事業を確認した。もちろん、四国会盟より以前のチベットが仏教事業を行わなかったというわけではない。チベットが仏教を国教化したのはチソンデツェン治世の 761 年であるし<sup>(43)</sup>、有名なサムイェ僧院が建立されたのも同じくチソンデツェンのときである<sup>(44)</sup>。そもそも仏教自体はそれより以前、早くにはソンツェンガムポの時代に伝来していた可能性が高い<sup>(45)</sup>。しかし、ここで強調したいのは、会盟成功以降のチベットが、大規模な仏教事業を盛んに挙行了たということである。後のチベット文史書ではチツクデツェンの治世を仏法が盛り上がった時代として称揚するが、それは決して根拠がないわけではなく、おそらくは上述のような事情がある程度後世にまで伝わった結果なのであろう。

しかし一方で、このような仏教事業には相当な財政拠出が予想される。実際のところ、この時代における仏教教団への経済保護政策の跡は文書史料にも仄見えるのである。幾つかの例をみてみよう。まずは、敦煌文書 IOL Tib J

(43) Cf. 山口 1978, p. 2.

(44) Cf. 山口 1978, pp. 5-6.

(45) チベットの伝承によると、ラサのジョカン寺はソンツェンガムポの時代にネパールの建築家によって建てられたというが、建築学的調査によると寺の最古の部分の年代は 6 世紀に遡る。Cf. Alexander 2005, pp. 54-55.

575+1357 は次のようなパターンを持つ人名リストを挙げる（岩尾 2007, pp. 167, 172）。

張ペンレクのタムツェンに：

カムスム・ダクパ寺院の施主 張ペンレクのキャ

カムスム・ラメー寺院の施主 索（…）のキャ

カムスム・ギャルワ寺院の施主 索クワントンのキャ（後略）

(IOL Tib J 575, ll. 9-11)<sup>(46)</sup>

このリストに現れる人名は敦煌漢人たちで、全員がトンサル千戸（stong sar kyi sde）というチベット支配下の敦煌に設置された軍千戸<sup>(47)</sup>に属している。タムツェンとは千戸部の下部組織であり<sup>(48)</sup>、本文書によると 10 の戸から成り立つ。本文書は断片であるが、千戸部を構成する戸主たちがそのままりストにされているようである。

このリストには大量の寺院が現れるが、これらが実在した可能性は低く、名目的に寺院名を付けただけだと考えられる（岩尾 2007, pp. 180-181）。このリストが示唆するのは、チベット支配下敦煌における漢人部落の戸口が、仏教教団への寄付を組織的に徴収されていたということなのである。さらに興味深いのはこれら戸口毎からの徴収が「キャ（rkya）」と呼ばれる徴税単位に基づいて

(46) *cang 'phan legs gyi khram tshan la//khams gsum grags pa'i* (10) *yon bdag cang 'phan legs gyi rkya khams gsum bla myed gtsug khag khang gi yon bdag sag* (11) [...] *khams gsum rgyal ba'i gtsug lag khang gi yon bdag sag kvang thong gyi rkya//*

(47) 古代チベット帝国支配下の一般民は、軍戸（rgod）か民戸（g.yung）に振り分けられた（Uray 1977, 山口 1983, pp. 876-879）。チベット支配下の敦煌においても同様で、敦煌漢人は当初全て民戸に編入されたが、後に相当数が軍戸に選抜され、幾つかの軍千戸が形成された。9 世紀の敦煌にはゴースル千戸（rgod sar gyi sde）、トンサル千戸（stong sar gyi sde）、ニンツォム千戸（snying tsoms gyi sde）という三つの軍千戸があったことが確認される。Cf. 岩尾 2003.

(48) タムツェンは経済的な機能を有する単位と推定される。Cf. Takeuchi 1994, p. 854, 岩尾 2007, pp. 182-183.

いたということである。この「寄付」とは結局のところ徴税の一種に他ならないのであり、そしてその徴収された「寄付」は明らかに仏教教団のためのものなのである。

また、P. ch. 2162v「左三将納丑年突田歴」<sup>(49)</sup>には、各戸が収めるべき税の使用用途に、時折仏寺の支出が混じる。例えば、納税の目的に「一千人齋」（池田 1979, p. 543 の行番号で 4, 6, 11, 20, 21）, 「四百人齋」（同前 6, 17, 26）, 「四万人【齋】」（同前 19, 29）など、齋会のための納入寄進が確認できるのである。

さらに、S.10647+P.t.1111 は、敦煌より上位の行政機構であるデカム（bde khams）の会計事務局<sup>(50)</sup>により認可された、敦煌穀物倉決算認可の副本である。文書裏には漢字で「申年三月六日算倉斛斗畢迴残印」とあり、その申年は 816, 828, 840 年の 3 つの可能性があるが（岩尾 2011, p. 60）、いずれにせよ 9 世紀前半に属する文書である。この文書に現れる穀物倉には「敦煌漢人軍戸の穀物徴収用倉」と「敦煌のクワ税（khva）<sup>(51)</sup>用穀物倉」の二種類があるが、その二種類の穀物倉の会計いずれにも、敦煌の仏寺で行われる齋への援助などが支出に計上されている（岩尾 2011, pp. 51-52）。

敦煌の穀物倉が仏寺に支出したことを上級機関に報告し、それが認可されていたということは、仏寺への支出は敦煌独自の施策ではなく、デカムの会計事務局も認可する公認事業であったということを示す。上に引用した 3 つの史料は全て敦煌文書であるが、これらを見れば明らかなおとおり、少なくとも敦煌における仏教教団の維持には公金が投入されていたのであり、支出は結局のところ敦煌漢人からの徴税によって成り立っていたのであった。チツクデツェンの過熱気味な仏教保護の様子や仏教事業の規模からすると、敦煌のみでこのよう

(49) 本文書の代表的研究に姜 1984, pp. 13-16, 楊 1986, pp. 380-387, 池田 1990, pp. 51-55 がある。また、同文書中の漢人たちの所属については岩尾 2007, pp. 176-178 も参照されたい。

(50) デカムについては Richardson 1998 [1990] を参照されたい。

(51) khva が徴税の一種であることは金石史料や敦煌文書の例からみて間違いはないが、その目的や徴収物に関しては未詳である。Richardson 1985, p. 95, 161, 岩尾 2011, p. 61 参照。

な状況が出現したとは考えにくく、むしろチベット中央を含む帝国領域内でも状況は同じようなものであったと類推できる。

しかし仏教事業にかかる費用はそのまま被支配民の負担となり、ひいては帝国の経済状況を悪化させたはずである。チツクデツェンの支配は815年以降841年までの26年間であり、会盟後から数えても18年間に及ぶ。仏教史の伝えとおりチツクデツェンの死去まで仏教事業が継続されたとすると、帝国の経済状況はその間一貫して圧迫され続けたことになる。ここにチツクデツェンの崇仏派に反対する勢力の不満が高まったことは想像に難くないのである。前述のとおり、『王統鏡』によると、崇仏派の中心勢力である僧ベルギンテンは皇妃と関係をもったと誣告されて処刑され、またチツクデツェンも暗殺されるに至ったのであった。841年のことである<sup>52)</sup>。続いてダルマが登位したが、わずか一年後の842年に暗殺され、チベット帝国は内部崩壊へと到ったのである。

## 6. む す び

本稿で検討した結果をまとめると、次のようになる。

- ・ 唐、ウイグルとチベットの会盟は「三国会盟」と称されてきたが、実際には南詔もチベットと会盟を結んでいた。そこで四国会盟と呼ぶべきである。
- ・ 四国会盟は、関係国が一堂に集まって結ぶタイプの会盟でなく、実際にはチベットが各国と二国間で会盟したのを総称したものである。
- ・ 四国会盟は明らかにチベットの主導によるものであり、チベットは唐の包囲作戦を打破する意図をもって、唐をふくむ各国と個別の会盟を結んだ。
- ・ 一連の会盟の成功はチベット国内で大いに顕彰され、その結果多くの仏教事業が举行されたが、過度の事業推進による経済的負担はチベット帝国の弱体化と崩壊につながった。

<sup>52)</sup> チツクデツェンの死亡年と続くダルマの登位年については幾つかの議論があったが、最終的に佐藤（1986）によって841年と確定された。

四国会盟の成功が、中央アジアとチベット両方の歴史において重要な出来事であったことは明らかであろう。6世紀末から7世紀初めに誕生した新興国家が、わずか2世紀後にユーラシア東部の外交主導権を握るに至ったのであるから、チベット人たちがこの成功を大いに宣伝したのも全く不思議ではないのである。

チベットの歴史上においても四国会盟の成功は一大画期となった。会盟以前のチベットにおいて仏教はすでに国教であったが、仏典翻訳や寺院の建立など仏教事業が一気に加速したのが四国会盟以降であったことに注目すべきであろう。しかしその一方で、行き過ぎた仏教事業の展開はチベットの経済にとって大きな負担となり、結果として841年のツェンポ暗殺に終わった。次代のツェンポであるダルマ個人が廃仏派か崇仏派であったかどうかはともかくとして<sup>(53)</sup>、行き過ぎた仏教事業にある程度の抑制がかけられたことは想像に難くない。

さて、残る課題の一つに、デガユツェル会盟原の位置比定がある。もし本稿での結論が正しければ、会盟原では各国の代表者がそれぞれチベットの代表者と会盟を結んだはずなのであるが、それは一体何処なのか。重要な問題ではあるが、紙幅の都合上本稿では扱うことができなかった。別稿にて検討したい。

注記：本稿におけるチベット文翻字は基本的にいわゆる Wylie 方式 (Wylie 1959) に従った。ただし例外として、逆向きの i を「I」で示した。

#### 略号表 (一次史料)

『デガユツェル祈願文』: P. t.16+IOL Tib J 751. 写真: Spanien and Imeda 1978, pls. 7-16.

『パンタンマ目録』: *Dkar chag 'phang than ma/Sgra sbyor bam po gnyis pa*. 北京: 民族出版社, 2003.

(53) チベットの伝統によれば、ダルマは廃仏を行うことによってチベットを崩壊に導き分裂の暗黒期をもたらしたとされる。しかし山口 (1995), Yamaguchi (1996) によると、彼はむしろ崇仏派であった。

- 『王統鏡』：Sa skya pa bsod nams rgyal mtshan, *Rgyal rabs gsal ba'i me long*. 北京：民族出版社，1981.
- 『漢藏史集』：Stag tshang dpal 'byor bzang po, *Rgya bod yig tshang chen mo*. 成都：四川民族出版社，1985.
- 『旧唐書』：劉昫等（撰）『旧唐書』全200卷。北京：中華書局，1975.
- 『賢者の喜宴』：Dpa' bo gtsug lag phreng ba, *Chos 'byung mkhas pa'i dga' ston*. 北京：民族出版社，1986.
- 『紅史』：Tshal pa kun dga' rdo rje, *Deb ther dmar po*. 北京：民族出版社，1981.
- 『冊府』：王欽若等（撰）『宋本冊府元龜』。北京：中華書局，1989.
- 『新唐書』：歐陽修等（撰）『新唐書』全225卷。北京：中華書局，1975.
- 『通鑑』：司馬光（撰）『資治通鑑』全294卷。北京：中華書局，1956.
- 『唐会要』：王溥（撰）『唐会要』全100卷。台北：世界書局，1989（第5版）.
- 『仏教入門』：Bsod nams rtse mo, *Chos la 'jug pa'i sgo zhes bha ba'i bstan bcos*. In 『サキャ派全書集成』（全15卷，東京：東洋文庫，1968）第2卷，pp.318-345.

#### 参考文献（二次史料，abc順）

- Alexander, A. (2005) *The Temples of Lhasa: Tibetan Buddhist Architecture from the 7th to the 21st Centuries (Tibet Heritage Fund's Conservation Inventory) (Tibet Heritage Fund Conservation Inventory)*. London: Serindia Publications.
- Bazin, Loius and Hamilton, James (1991) L'origine du nom Tibet. In E. Steinkellner (ed.), *Tibetan History and Language: Studies Dedicated to Uray Géza on His Seventieth Birthday*, Wien: Arbeitskreis für tibetsche und buddhistische Studien Universität Wien, pp. 9-28.
- Beckwith, Ch. I. (1987a) *The Tibetan Empire in Central Asia*. Princeton: Princeton Univ.
- (1987b) The Tibetans in the Ordos and North China: Considerations on the Role of the Tibetan Empire in World History. In Ch. I. Beckwith (ed.), *Silver on Lapis*, Bloomington, pp. 3-12.
- 藤枝晃 (1961) 「吐蕃支配期の敦煌」『東方学報』31, pp.199-292.
- Halkias, Georgios T. (2004) Tibetan Buddhism registered: a catalogue from the imperial court of 'Phang thang, *The Eastern Buddhist*, 36(1-2), pp. 46-105.
- Herrmann-Pfandt, Adelheid (2008) *Die Lhan kar ma: Ein fruher Katalog der ins Tibetische ubersetzten buddhistischen Text*. Wien: VOAW.
- 黄維忠 (2007) 「関于 P. T. 16, IOL TIB J 751I 的初步研究」王堯（編）『賢者新宴』5. 上海：上海古籍出版社，pp. 63-89.
- (2009) 「德噶玉采会盟寺 (de ga g.yu tshal gtsigs kyi gtsug lag khang) 考

- 再論該寺非榆林窟』『敦煌研究』2009-3, pp. 93-99.
- 黄文煥 (1978) 「河西吐蕃文書簡述」『文物』1978-12, pp. 59-63.
- 池田温 (1979) 『中国古代籍帳研究』東京：東京大学出版会。
- (1990) 「敦煌における土地税役制をめぐる —— 九世紀を中心として ——」  
唐代史研究会 (編) 『東アジア古文書の史的研究』東京, pp. 46-70.
- 岩尾一史 (2003) 「吐蕃支配下敦煌の漢人部落 —— 行人部落を中心に ——」『史林』  
第86巻第4号, pp. 1-31.
- (2007) 「チベット支配下敦煌の納入寄進用リスト —— IOL Tib J 575, 1357  
(A), (B) の紹介 ——」『敦煌寫本研究年報』創刊號, pp. 165-189.
- (2011) 「古代チベット帝国支配下の敦煌における穀物倉会計：S.10647+  
Pelliot tibétain 1111 の紹介」『内陸アジア言語の研究』XXVI, pp. 39-74
- Iwao Kazushi (2012) The Purpose of Sutra Copying in Dunhuang Under the Tibetan  
Rule. In I. Popova and Liu Yi (eds.), *Dunhuang Studies: Prospects and Problems  
for the Coming Second Century of Research*. St. Petersburg: Slavica, pp. 102-105.
- (2013) Reconsidering the Sino-Tibetan Treaty Inscription. In Takeuchi Ts.  
and Hayashi N. (eds.), *Historical Development of the Tibetan Languages (Journal  
of Research Institute, vol. 49)*. Kobe: Research Institute of Foreign Studies, Kobe  
City University of Foreign Studies.
- Iwao K., Hill, N. and Takeuchi Ts. (2009) *Old Tibetan Inscriptions (Old Tibetan  
Documents Online Monograph Series vol. II)*. Tokyo: ILCAA.
- Iwao K., van Schaik, Sam and Takeuchi Ts. (2012) *Old Tibetan Texts in The Stein  
Collection Or. 8210: Studies in Old Tibetan Texts from Central Asia, vol. 1  
(Studia Tibetica No. 45)*. Tokyo: Toyo Bunko.
- 姜伯勤 (1984) 「突地考」『敦煌學輯刊』1984-1, pp. 10-18.
- Kapstein, Matthew (2004) The treaty temple of De ga g.yu 'tshal: iconography and  
identification. In Huo Wei (ed.), *Essays on the International Conference on  
Tibetan Archeology and Art*. 成都：四川人民出版社, pp. 98-127.
- (2009) The treaty temple of the turquoise grove. In: M. Kapstein, (ed.),  
*Buddhism Between Tibet and China*. Boston: Wisdom Publications, pp. 21-72.
- 川越英真 (2005a) 「『パンタン目録』の研究」『日本西蔵学会々報』51, pp. 115-131.
- (2005b) 『dKar chag 'Phang thang ma』東北インド・チベット研究会。
- Lalou, Marcelle (1954) Les manuscrits tibétains des grandes Prajñāpāramitā trouvés  
à Touen-houang. *Silver Jubilee Volume of the Zinbun Kagaku Kenkyusho Kyoto  
University*, pp. 257-261.
- Li, Fankuei and Coblin, L. S. (1987) *A Study of Old Tibetan Inscriptions*, Taipei:  
Academia Sinica.
- 李正宇 (1997) 「吐蕃論董勃藏修伽藍功德記兩殘卷の發現, 綴合及考證」『敦煌吐魯番

- 研究』2, pp. 249-257.
- 馬徳 (2009) 「西藏発現的《喇哇經》為敦煌写經」『敦煌研究』2009-5, pp. 79-83.
- 森部豊 (2010) 『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』大阪：関西大学出版部.
- 森安孝夫 (1977) 「チベット語史料中に現われる北方民族：DRU-GU と HOR」『アジア・アフリカ言語文化研究』14, pp. 1-48.
- (1978) 「増補：ウイグルと吐蕃の北庭争奪戦及びその後の西域情勢について」流砂海西獎学会 (編) 『アジア文化史論叢』3 東京：山川出版社, pp. 199-238.
- (1984) 「吐蕃の中央アジア進出」『金沢大学文学部論集 史学科篇』4, pp. 1-85.
- (1987) 「中央アジア史の中のチベット —— 吐蕃の世界史的位置付けに向けての展望」長野泰彦・立川武蔵 (編) 『チベットの言語と文化』東京：冬樹社, pp. 44-68.
- (2007) 『シルクロードと唐帝国』東京：講談社.
- 森安孝夫・オチル (1999) 『モンゴル国現存遺跡・碑文調査研究報告』大阪：中央ユーラシア学研究会.
- 森安孝夫・吉田豊 (1998/99) 「モンゴル国内突厥ウイグル時代遺跡・碑文調査簡報」『内陸アジア言語の研究』13, pp. 129-170.
- 寧夏回族自治区博物館 (1988) 「寧夏塩池唐墓発掘簡報」『文物』1988-9, pp. 43-56.
- 西沢史仁 (2011) 『チベット仏教論理学の形成と展開 —— 認識手段論の歴史的変遷を中心として——』全4巻. 博士学位論文, 東京大学.
- Pelliot, Paul (1914) Notes à propos d'un catalogue du Kanjur, *Journal Asiatique*, 4, pp. 114-150.
- 任小波 (印刷中) 「敦煌 ITJ751.1 号藏文写本所載《德論願文》訳釈」『継承と発展 —— 百年敦煌学：文献と歴史編』蘭州.
- Richardson, H. E. (1985) *A Corpus of Early Tibetan Inscriptions*. London: Royal Asiatic Society.
- (1998) [1990] The province of the Bde-blon of the Tibetan empire, eighth to ninth centuries. In M. Aris (ed.), *High Peaks, Pure Earth*, London: Serindia publications. pp. 167-176. 初出: P. Daffins (ed.), *Indo-Sino-Tibetica: Studi in onore di Luciano Petech*, Roma, pp. 305-315.
- 佐藤長 (1977) 『古代チベット史研究』2巻, 京都：同朋舎. 初版：1958-59.
- (1986) 「ダルマ王の在位年次について」『中世チベット史研究』京都：同朋舎, pp. 9-42.
- Ska ba Shes rab bzang po (2009) Gnya' yul gro mkhar dgon d bzhugs pa'i bla 'bum skor ngo sprod zhu ba. In: 敦煌研究院 (編) 『敦煌吐蕃文化學術研討會論文集』蘭州：甘肅民族出版社, pp. 305-314.



- Spanien, A., and Imaeda, Y. (1978) *Choix de documents tibétains conservés à la Bibliothèque nationale*, vol. 1. Paris : Bibliothèque nationale.
- 菅沼愛語 (2010) 「唐・吐蕃会盟の歴史的背景とその意義 —— 安史の乱以前の二度の会盟を中心に ——」『日本西蔵学会々報』56, pp. 29-43.
- Szerb, Janosh (1983) A note on the Tibetan-Uigur treaty of 822/823 A.D. In E. Steinkellner and S. Tauscher (eds.), *Contributions on Tibetan Language, History and Culture : Proceedings of the Csoma de Körös Symposium Held at Velm-Vienna, Austria, 13-19 September 1981*, vol. 1, pp. 375-387.
- Takeuchi Tsuguhito (1994) *Tshan*: Subordinate Administrative Units of the Thousand-Districts in the Tibetan Empire. In P. Kvaerne (ed.), *Tibetan Studies : Proceedings of The Sixth Seminar of The International Association for Tibetan Studies, Fagernes 1992*, Oslo : The Institute for Comparative Research in Human Culture, pp. 848-862.
- 田坂興道 (1940) 「中唐に於ける西北辺疆の情勢について」『東方学報』(東京) 11-2.
- Thomas, F. W. (1951) *Tibetan Literary Texts and Documents Concerning Chinese Turkestan*, vol. 2. London : Royal Asiatic Society.
- Uebach, Helga (1991) dByar-mo than and Goñ-bu ma-ru. Tibetan Historiographical Tradition on the Treaty of 821/823. In E. Steinkellner (ed.), *Tibetan History and Language, Studies Dedicated to Uray Géza on His Seventieth Birthday*. Wien : Arbeitskreis für tibetische und buddhistische Studien Universität Wien, pp. 497-525.
- 上山大峻 (1985) 「敦煌出土「大乘経纂要義」攷 —— 八二二年チベット賛普発布の仏教綱要書」『中村瑞隆博士古稀記念論集仏教学論集』東京 : 春秋社, pp. 471-490.
- (1988) 「吐蕃の写経事業と敦煌」唐代史研究会 (編) 『中国都市の歴史的硏究』東京 : 刀水書房, pp. 190-198.
- (1990) 『敦煌佛教の研究』京都 : 法蔵館.
- Uray, Géza (1977) A propos du tibétain *rgod-g.yung*. In : *Études tibétaines dédiées à la mémoire de Marcelle Lalou*, Paris : Librairie d'Amérique et d'Orient A. Maisonneuve, pp. 553-556.
- 王堯 (1982) 『吐蕃金石録』北京 : 文物出版社.
- 王小甫 (1992) 『唐吐蕃大食政治關係史』北京 : 北京大学出版社.
- 呉均 (2007) 『呉均蔵学文集』上冊, 北京 : 中国蔵学出版社.
- Wylie, Turrel V. (1959) A standard system of Tibetan transcription. *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 22, pp. 261-267.
- 山口瑞鳳 (1978) 「吐蕃王国仏教史年代考」『成田山仏教研究所紀要』3, pp. 1-52.
- (1980) 「吐蕃支配時代」榎一雄 (編) 『講座敦煌 2 : 敦煌の歴史』東京 : 大東

- 出版社, pp. 197-225.
- (1981) 「沙州漢人による古代チベット二軍団の成立と mKhar tsan 軍団の位置」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』4, pp. 13-48.
- (1985) 「『デンカルマ』 八二四年成立説」『成田山仏教研究所紀要』9, pp. 1-61.
- (1995) 「ゲルマ王の「破仏」は虚構」『成田山仏教研究所紀要』18, pp. 1-30.
- Yamaguchi Zuiho (1996) The Fiction of King Dar-ma's persecution of Buddhism. *De Dunhuang au Japon : Etudes chinoises et bouddhiques offertes à Michel Soyminié*. Genève : Librairie Droz S. A.
- 楊際平 (1986) 「吐蕃時期沙州社会経済研究」韓国磐 (編) 『敦煌吐魯番出土經濟文書研究』厦門 : 厦門大学出版社, pp. 357-413.
- 楊銘 (2008) 「敦煌藏文写本《岱噶玉園会盟寺願文》研究」『西北民族論叢』6, pp. 230-251.
- 張怡蓀 (主編) (1993) 『藏漢大辭典』(*Bod rgya tshig mdzod chen mo*) 上下卷, 北京 : 民族出版社.
- 張延清 (2010) 「淺談西藏卓卡寺藏經与敦煌《大般若經》的關係」『西藏研究』2010-2, pp. 36-43.

[本研究は科研費・若手研究(B)23720347 ならびに基盤研究(B)22320079 による成果の一部である。]

of the colonial government (the British North Borneo Chartered Company) in the recruitment of Chinese laborers. Yet, the terms of contracts were revised, and the treatment of Chinese laborers began to improve. However, when the recruitment project started, various parties interested in immigration in Amoy objected to the project and moved local officials to arrest the Chinese recruiters who cooperated with the project. As a result, recruitment in Amoy became impossible. Furthermore, British authorities could not legally oppose the Chinese authorities in negotiations in Peking because the project aimed to recruit contract laborers at treaty ports, which would invoke the terms of the Convention of 1904. As a result, the effort of the British North Borneo Chartered Company to directly recruit Chinese laborers in southern China ended in failure.

This episode demonstrates the difficulty in the direct recruitment of Chinese laborers by foreign governments or foreign firms at treaty ports in China, where migration networks already existed. Given that the British North Borneo Chartered Company failed even with the support of the British government, it would surely have been almost impossible for foreign firms to develop their own networks. This case also shows that the competitiveness of the Chinese migration networks cannot be fully explained in economic terms alone.

## **DIPLOMACY OF THE OLD TIBETAN EMPIRE AND THE CONCLUSION OF THE “TRILATERAL” TREATY OF 822-823**

IWAO Kazushi

The “trilateral” treaty between Tang China, Uighur, and Tibet, which was concluded in 822-823, brought peace to the eastern part of Eurasia. Because of this, the treaty has been recognized as a significant event in the area of concern. Nonetheless, strangely no records of this event exist on the Chinese or Uighur sides, while there are records on the Tibetan side. Despite the fact there has been much scholarship done, the reality of the treaty has not been clarified. Nor has the effect of the treaty on Tibet been addressed. Using numerous historical sources in Tibetan and Chinese, including Dunhuang documents such as *Prayers for the foundation of the De ga yu tshal monastery* (P.t. 16 + IOL Tib J751), this paper focuses on clarifying the details of the actual process and consequences of the

treaty. The conclusions are as follows :

- Previous studies have generally shown that the treaty in 822–823 was concluded between three states, namely Tibet, Tang China, and Uighur. However, *Prayers for the foundation of the De ga yu tshal monastery* clearly states that Tibet concluded the treaty with “three great states,” namely Tang China, Uighur, and Nanzhao, which indicates that this treaty was actually involved four states.
- The treaty was not of the type where delegations of the four states gathered and determined issues. In fact, leading the international diplomatic efforts, the Tibetan Empire succeeded in simultaneously but secretly concluding individual bilateral treaties with Tang China, Uighur, and Nanzhao. Thus, it seems that Tang China was unaware of Tibet’s maneuvers; consequently, Tang records mentions only the bilateral treaty between Tang China and Tibet.
- The Tibetan Empire proposed the treaties to break Tang China’s encirclement of Tibet, which was based on alliances with Uighur and Nanzhao that were forged in the 780 s, and thus proceeded to establish an individual treaty with each state.
- To commemorate the diplomatic success of the series of treaties, the Tibetan Empire carried out numerous Buddhist projects; however, the excessive cost of the projects resulted in an economic burden that eventually caused the deterioration and collapse of the Tibetan Empire.

## **TWO LOCAL ‘HISTORIES’ OF ISFAHAN : WHY ḤADĪTH SCHOLARS REPEATEDLY COMPILED WORKS THAT WERE NEARLY IDENTICAL**

MORIYAMA Teruaki

This paper analyzes two works of local history that were written in Arabic. The first work is *Ṭabaqāt al-Muḥaddithīn bi-Aṣṣbahān*, or *Generations of Ḥadīth Transmitters in Isfahan*, by Abū al-Shaykh (d. 974 A.D.). The second is *Dhikr Akhbār Isfahān : Ta’rikh Isfahān*, or *Memorizing Information of Isfahan : History of Isfahan*, by Abū Nu’aym (d. 1038). The major parts of both those two local histories of Isfahan, which were compiled in Isfahan, are occupied by biographical